

甘すぎる求愛の断り方

Haruka & Arata

橘 柚葉

Yuzuba Tachibana



エタニティ文庫

目次

甘すぎる求愛の断り方

5

甘すぎる求婚の仕方

227

書き下ろし番外編

甘すぎる誘惑の仕掛け方

321

甘すぎる求愛の断り方

「眼鏡男子は、もう、こりごりだあああ！」

上座の方にちよつとしたステージもある、四十畳ほどの宴会場。そんな場で、私は叫んでいた。

ただ、周りは酔っ払いばかりで騒がしく、私の嘆く声はすぐにかき消される。

今日は、会社の忘年会だ。

会場は会社最寄り駅から二駅ほど離れた場所にある居酒屋『沙わ田』。お店の二階を貸し切りにし、私の所属する総務部総勢五十名での大宴会が夜七時より行われている。

私がオレنجジュース片手に語り続けていると、近くに座っていた同僚が「また始まったか」と呆れ顔をする。だが、私の愚痴は止まらない。

渋谷遙、二十七歳。短大卒業後、車の部品を製造する上場企業に就職し、総務部で事務員として働き続けている。

小柄な体形と雰囲気ので、幼く見えてしまうのが悩みの私。そのため、少しでも

大人っぽく見られるようにセミロングの髪を落ち着いたブラウンにカラーリングしている。

また、ファッションもちよつとだけ背伸びをしないと年齢相応に見られない。

今日の装いは、膝丈タイトスカートの黒のニットアップで大人を目指している。

『若く見られるなら、いいじゃない』

同僚たちはこう言うが、それは違う。若くじゃなくて、幼く見えるのだ。その違いはとても大きい。

だが、問題は見た目だけではない。落ち着きのない中身もまた大人からほど遠いということは自分でもよくわかっている。そのせいでファッションや髪形だけでは、残念ながら理想に追いつかないのだ。

そんな私は、彼氏がいない歴うん年。だけど、焦りなどは全くなく、恋愛しなくても別にいいやという投げやりっぷりだ。

……

「眼鏡男子を見ると、ドキドキしちゃうんだよ。でもなあ……」

私の嘆きに、同僚が口を挟んできた。

「元彼たちのせいで眼鏡男子不信なんだろ、渋谷は」

「そうなんだよ。だから絶対に眼鏡男子に近づくことはできない！」

不憫なヤツだ、と同僚たちは揃って苦笑する。そしてオレンジジュースの瓶を持ち、お酌をしてくれた。

先ほどの嘆き通り、私は眼鏡男子が好きなのだ。けれども、彼らにひどい目に遭わされた経験から、今では近づくのも嫌になってしまっている。

「渋谷、過去の恋愛がなんだ！ まだ眼鏡男子を諦めちゃいかん。害がない眼鏡男子だっているかもしれないぞ？」

「いいの、眼鏡男子は私にとって鑑賞物。それに愛とか恋とか……こりごりだし」
 そう言ったところ、同僚たちは干物女子になるにはまだ早い、と笑いつつお酒が得意ではない私にオレンジジュースを飲めと促す。

私は深く頷いたあと、グラスに入っているオレンジジュースを飲み干した。

下座でそんな話をしていると、会場内が急にざわつき始める。一体、何事だろう。

「おい、課長の様子がおかしいぞ！」

誰かの叫び声が聞こえたと思ったら、バタンと大きな音がした。

慌てて音がした方に視線を向けると、先ほどまで陽気にお酒を飲んでいた課長が倒れ、痙攣している。

驚きのあまり声も出せず、呆然としてみると、ふと部長と目が合った。

「渋谷さん、救急車を手配して！」

「は、はい！」

部長に言われ、私は慌てて立ち上がった。だが、気が動転していて思うように身体が動かない。

今は一分一秒を争う緊急事態だ。早くお店の人を捕まえて、救急車の手配を頼まなければいけないのに、もどかしい。

もつれる足をなんとか動かし、私は靴も履かずに宴会場を飛び出す。
 (どうして、こんなことになっちゃったの?)

明るい総務部メンバーの中でも一際お祭り騒ぎが大好きな課長は、いつもの調子で陽気に日本酒を飲んでいた。

そんな課長がいきなり倒れるなんて、誰も思っていなかっただろう。
 そう考えながら、私は転がるように階段を駆け下りていく。

「スママセン！ 男性が倒れました。救急車の手配をお願いします！」

初めて来たお店で、住所などはわからない。私が一一九番通報をしても埒があかないのは目に見えている。

それなら周辺の地理をよく知っている店長さんをお願いした方がいい。そう判断して叫んだ私の腕を、誰かが突然、後ろから掴んでくる。

驚いて振り返ると、そこには真剣な面持ちで私を見下ろしている男性がいた。

長身にスラリとした体形で、明るい茶色の髪はサラサラだ。

着ているものは細いストライプが入ったシャツに、黒ニット。チャコールグレイのジャケットを羽織り、黒のスキニーパンツを穿はいている。スマートだけどしだけカジュアルな装まいだ。

優しげな雰囲気かを醸かし出すその男性は、スクエア型の眼鏡をかけていて、とても知的に見える。

好みの眼鏡男子の姿に、ドキッと胸が高鳴ってしまった。だが、今はそれどころではない。私は高揚した気持ちを隠しながら口を開く。

「あの、何か……?」

戸惑いつつ男性を見つめていると、彼は上を指差した。

「倒れた人がいるのは、二階ですか?」

「あ、はい」

コクコクと何度も頷けば、男性は私の腕から手を離し、二階に飛んで行った。

店長さんが「救急車を手配しておくから」と言ってくれたので、簡単に課長の状態を伝えたあと彼を追いかけるように二階へ駆け上がる。

私が二階に着くと、先ほどの彼は靴を脱いで座敷に上がるところだった。着ていたジャケットを脱ぎつつ、男性は大きな声で言う。

「私は医者です。倒れた方はどこですか?」

誰かが答えた直後、男性は倒れている課長のそばへ行き、「大丈夫ですか。返事はできますか?」と肩を叩き始めた。

意識はあるようで、課長は弱々しい声で返事をしている。

(あの人、お医者様だったんだ)

男性は課長のネクタイを解ほどき、ワイシャツのボタンをいくつか外して衣服を緩ゆるめていく。

そのあと課長を横向きに寝かせ、自分が着ていたジャケットをかけた。

「今、救急車が来ますから安心してください。大丈夫ですよ」

課長だけではなく周りにいた私たちにも、男性医師は安心するように、落ち着くようにと論ます。

笑みを浮かべた彼の表情はとても優しげで、柔らかい雰囲気だ。きっと小児科の先生に違いない。

少し落ち着きを取り戻した我々をよそに、男性医師は課長の手首を指で押さえ、時計を見つめている。

バイタルチェックをし続けるその横顔は真剣で、目が離せない。

男性医師の行動を見守っていると、救急車が到着した。店内に入ってきた救急救命士

に、彼はバイタルの報告をし始める。

他の隊員の手でストレッチャーに乗せられた課長の顔色は、先ほどと比べればよくなってきたように見える。

意識もすっかりしてきたみたいで、私たちは胸を撫で下ろした。

救急救命士への引き継ぎを終えた男性医師に、部長が「色々お世話になりました。ありがとうございます」と頭を下げる。そして、「あとは我々の方でやりますので」と言ったのだが、男性医師は真剣な表情で首を横に振った。

「私は医者ですから、最後まで患者さんに付き添いますよ」

そう言った彼は、救急車に乗り込んだ。

去り際までとても優しく爽やかな男性医師に、女性社員たちは頬を染めていた。

（確かにステキな男の人でドキドキしちゃったけど……眼鏡している人はちょっと信用できないからな）

世の中の眼鏡男子と先ほどの医師に対して、大変失礼なことを思ってしまう。

最初は「ステキな人！」とドキドキしていたことは、すっかり棚に上げていたのだった。

* * *

結局、課長は大事なくすぐに病院から帰ることができたようだ。そんな大騒ぎになった忘年会からしばらく経過し、明日は成人の日という夜。夕食の直後、弟の武が話を切り出してきた。

「姉さん。今、付き合っている人とかいないのか？」

「またその話？」

私の目の前にミルクプリンを差し出しながら、武は頷く。

ここ最近、弟は私の将来をとっても心配しているらしく、彼氏はいないのかとよく聞いてくるのである。

武は二十歳になったばかり。そんなひよっ子に心配されるのは複雑な心境だ。

歳の離れた弟である武とは血の繋がりはない。

お互いの親が再婚したことにより家族となったのだ。

家族になってから早十年。私は武のことをずっと可愛がっているし、武も姉である私を慕ってくれている。

それは今も変わらない。だが、三年前に両親が仕事の都合で海外へ移り住んでからというもの、武は生意気になり、私への小言が増えた。

姉のことを心配してくれるのはありがたいが、たまに面倒だと思ってしまうときも

ある。

見つからないように小さく息を吐いた私は、お小言を聞き流しながらスプーンを手にする。

武お手製のミルクプリンが甘さも丁度よく、私の大好物だ。

それをスプーンで掬い、一口食べる。

口に広がるミルクの風味といい、プリンとした食感といい、絶品と称するにふさわしいプリンである。

質間に答えもせず、美味しい！と連呼している私に、武は深くため息をついた。

「姉さんもいい年だろう？ 結婚だつてそろそろ視野に入れた方がいいんじゃないか？」

「いい年は余計よ」

そう言つて口を尖らせると、「突つ込むところ、そこじゃなくてさあ」と武は大袈裟に肩を竦めた。

「姉さんは、結婚したいとか思わないわけ？」

「思わない。結婚しなくても全然平気だし」

心配しなくて大丈夫よ、とトンと胸を叩くと、武は肩を落とす。

彼はテーブルに突つ伏し、困つたように私を見上げた。

「平気じゃないから俺が口を酸っぱくして言っているんだけど！」

「何ですよ？ 大丈夫だつてば」

カラカラと笑つて武の肩を叩いたが、未だに武のしかめっ面は直らない。

「姉さんつてさ、意外にしつかり者なのに、どうして女子力や生活力が皆無なんだろう」

「うっ……」

「生活力がある人にそばで監視してもらわなきゃ、心配で仕方がない」

「そこまで言う!？」

「言う。だつて、飢え死にするのが目に見えてる！」

確かに私は家事が全然できない。だからつて、そんな切羽詰まった言い方をしなくてもいいのに……いや、すべて本当のことだから何も言い返せないけど。

それでも少しだけ抵抗してみる。

「武みたくに何でも家事ができる人なんて、なかなかいないわよ？ そんな男性を見つめるのは無理」

そう断言すると、武はカッと目を見開いて怒り出した。

「だからこそだ！ 早くそういう完璧な人を探してくれ！」

「は、はい！」

「姉さんが心配で心配で、俺は恋愛したくてもできないでいるのに！」

「え？ 誰かい人いるの？ 私、挨拶したい。武の保護者として」

武にもようやく恋人ができたのだろうか。だからこそ、私への小言が増えていたのかもしれない。

両親が日本にいない今、武の保護者として立派に振る舞わなくては。そう考えていると、武は目をつり上げた。

「俺ももう成人してるんだから保護者はいらぬ。とにかく姉さんは自分のことだけを考えてろ！」

すごい剣幕に、そのときはココクと頷いたが、あとから思い返せば腹が立つことばかり言われていたと気付いた私は憤慨したのだった。

連休明け。私は昼休憩のときに、会社の先輩である美玖さんに溜まった鬱憤をぶちまけた。

「美玖さん、ヒドイと思いませんか？」

ここはスタッフ棟の五階にある食堂。ワンフロアを使った広い食堂には、定食や麺物、丼物などが各種揃っている。

味がよく安いので、社員のほとんどはここを利用していた。

我が社の昼休憩は二部制になっていて、工場で働くスタッフは三十分前に昼休憩が終

わっている。今、ここにいるのはスタッフ棟で働く社員ばかりだ。

全員が一気に休憩を取らないとはいえ、食堂内はかなりの混雑だった。

「うちの弟、絶対にヒドイと思うんです！」

人がごった返す食堂に、再び私の怒りの声が響く。

持っていたおにぎりを握りつぶしそうな勢いの私を見て、美玖さんはパチパチと目を瞬かせた。

「えっと、弟くんの方が正しいと思うけど」

思いもよらぬ答えが返ってきて、私は目を丸くする。

「えー！ 美玖さんは私の味方だと思ったのに」

驚いて声を上げると、切れ長の目を私に向けた美玖さんは、手にしていた箸を置いて冷静に言う。

「味方にはなれないかもしれないわね。だってさつきも言った通り、弟くんが言っているの方が正しいと思うし」

そうでしょうか、と不満を露わにすれば、「ええ」とピシヤリと返されてしまった。納得がいかず口を尖らせる私を見て、美玖さんは肩を竦める。

寺島美玖さん、二十八歳。私より一つ年上で頼りになる先輩だ。

新人研修のときにお世話になって以来、所属は違うが公私ともに仲良くお付き合いさ

せていただいている。

艶やかな黒髪をポブカットつゃにしている美玖さんは、きめの細かい色白の肌を持つ和風美人だ。

憧れている女性社員は多いし、男性社員からも熱視線を浴びる存在である。

そんな彼女だが、かなり長い間、彼氏はいない。世の中、本当にわからないものだ。

美玖さんは私をジッと見つめ、「弟くんが正しいと思う」と嘸かみしめるように再び言った。

ダメ押しをされ、私は肩を落とす。

美玖さんには兄と弟がいて、長女という立場。

私と同じように弟がいる境遇だからってつきり私の意見に同調してくれると思っていたので、ちよつぴりガツカリだ。

美玖さんはコーヒーを飲んだあと、テーブルに肘ひじをついて手を組む。

「遙は、もう少し恋愛した方がいいんじゃない？」

「面倒くさいからイヤです」

きっぱり言い切る私を見て、「決断が早いわね」と美玖さんは呆れた様子で苦笑する。「そう考えるのは、今まで付き合った男性がろくでもない人だったからでしょ？ちよつとツイていなかっただけじゃない？」

「そうでしょうか……私、どう考えても恋愛に向いていないんですよ。貧乏クジを引くのがうますぎると思いませんか？」

「確かにそれは言えてるかもしれない」

美玖さんと私は顔を見合わせ、同時に大きなため息をついた。

恋愛なんて面倒くさい、彼氏なんていらぬ。

そんなふうには言い切るまでには、涙なしでは語れぬ色々なことがあったのだ。

私に生まれて初めて彼氏ができたのは、就職して間もない頃。相手は眼鏡をかけた知的な男性だった。

すごく優しくして大人で、私が恋に墮おちるのは必然だったように思える。

彼から声をかけてくれて付き合い出したのだが、その一週間後に彼が二股をかけていたことが発覚した。

それを聞いただと、彼は「君とは遊びだつてわかっていただろう？」と悪びれもせず聞き直ったのだ。もちろん、すぐにお別れした。

その一年後、絶対に私だけを愛してくれる人がいいと願って付き合い出したのは、これまた眼鏡をかけた男性だ。

彼のごとは、ストイックで男らしい人だと思っていたのだが、すぐにある重大な欠点が発覚した。

基本的に堅実な考えを持った人なのに、なぜかお財布の紐は緩かったのだ。お金をせびられたため、それを断ったら振られてしまった。

「好きな男に金も貸せないのか」が、彼の捨て台詞である。

そんな感じで男性二人と付き合った私は思った。私には男運がなくて、今後、恋愛をしてもまた大変な思いをすることになるのではないかと。

そのあとも、付き合うまでいかずとも、眼鏡男子とは何度となく悲劇が繰り返されている。

近所のコンビニで眼鏡男子がバイトを始めたときも大変だった。

家の近所なので、私は毎日のようにそのコンビニに行っていた。そして、彼と知り合ったのである。

何度も顔を合わせていれば、次第に仲良くなっていくものだ。

挨拶をしたり、世間話をしたりイチオシ新商品を教えてもらったり……

仕事に行く前などは「今日も頑張ってくださいね。いつてらっしゃい」なんて可愛い笑顔で言われたりもした。

朝から眼鏡男子がエールを送ってくれるのだ。そりゃもう、気分がよくなるのである。

彼と会うたびに胸がキューンと高鳴っていた私だが、過去の教訓を忘れず、きちんと

自制していた。

その判断はとて正しかったと、後日確信することになる。

それは、いつものように出勤前にコンビニに寄り、眼鏡男子に「いつてらっしゃい。気をつけて」と声をかけてもらった、そのときだ。

「ちょっと、どういうことよ！ 最近私と会ってくれないと思ったら、浮気していただなんて！」

そう叫び鬼の形相で私たちに詰め寄る女の子は、キレイな栗色の髪を振り乱していた。服装や顔立ちを見る限り、大学生といった感じだ。

彼女は、私と眼鏡の彼を交互に睨みつけている。

どこでどう勘違いされたのか、私はどうやら眼鏡男子の浮気相手だと思われるようだ。朝の混み合う時間だったので、店内には私だけでなく、他にもお客さんがいた。

店内にいる客の誰もが、興味津々といった様子でこちらを見ている。

私もギャラリーとして見ていたのだが、そういう訳にもいきそうにない。

女の子のすごい迫力に息を呑んでいると、コンビニの店員である眼鏡男子は急に慌てふためき始めた。

動揺していた彼は、慌てて栗毛の彼女に訂正する。

「違うって、この人はお客さんだ。失礼なこと言うな」

「そんなの言い訳にしか聞こえないわよ。私の友達がこのコンビニでアンタと女がキスしているところ見たって言ってたんだから！」

女の子は、ギリギリと歯ぎしりをして眼鏡男子を鋭く睨みつける。
今にも眼鏡男子を殴りそうな勢いだ。

間違はなく修羅場しゅらばというヤツである。

ひえええ、と心の中で叫んでいると、今度はOL風の女性が店内に入ってきて眼鏡男子に詰め寄った。

「ねえ、この子ね？ なかなか別れてくれないって彼女ね？」

「いや、あの……その」

眼鏡男子、もう顔色が真っ青である。

そして、現彼女と新彼女候補の睨み合いが始まり、眼鏡男子争奪戦のゴングが鳴り響いた。

いがみ合う二人の視界には、お互いの敵しか入っていないようだ。

やっと無実が証明された私は、その場をあとにすることにした。

去り際、眼鏡男子に「助けてください」と言わんばかりの視線を送られたが、申し訳ないけれど助ける気はない。

自分でまいた種は、しっかりと自分で刈り取りなさい、と内心で合掌がっしょうした。

このコンビニの一件以外にも、こうした眼鏡男子絡みの恋愛トラブルに巻き込まれることが何度もあり、私はそのたびに思った。

男運がない私は恋愛をしない方が幸せになれる。特に眼鏡男子には近づいてはいけない。

この教訓を、私はとても大事にしているのだ。

今までの恋愛トラブルはどれも就職してからの話なので、美玖さんもすべて知っている。

だからこそ、貧乏クジうんぬんに対して素直に頷いてくれたのだ。

しかし、美玖さんは何か思うところがあるようで私を必死に説得し始めた。

「でも、超格好よくてステキな男に巡り会えば、恋愛したくない、彼氏はいららないなんて言えなくなると思うけどな」

「そんなものでしょうか？」

訝いぶかしげな私に、美玖さんは目を輝かせる。

「そんなものだと思う。うんうん、そんなものなのよ」

「ん？」

なんだか美玖さんの様子がおかしい。身構える私に、彼女は満面の笑みで言った。

「そういう人と出会ったために私がひと肌脱ぐから、合コンしよう！」

何を突然言い出したのですか、美玖さん。

私は慌てて首を横に振った。

「イ、イ、イヤですよ。合コンなんて」

「どうしてよ？ 新しい出会いを求めるとは悪くないと思うけどな」

先ほどまで目を輝かせていた美玖さんだが、今はなぜか威圧的な態度に豹変ひょうへんしている。怖いですよと言うと、彼女は意味深な笑みを浮かべた。

「遙の弟くんが巢立とうとしている今、姉が足を引つ張っていてもダメでしょう！」

「それを言われると……心苦しいですけど」

確かにその通りだ。

武が私のこれからを心配しているのは、きっと自分に好きな人ができたからだろう。

はつきりとは言わなかったが、あの必死さを見れば一目瞭然いちもくりょうぜんだ。姉の洞察力を嘗なめてもらっては困る。

武は恋愛真まつ只中ただなか。彼女ができれば忙しくなるから、今までのように私の面倒を見られないかもしれない、という不安があるに違いない。

だからこそ私に恋人を探せと言いつ出したのだ。そしてさっさと結婚して、旦那に面倒を見てもらえと言いたいのだろう。

しかし、反論したい。

別に武に面倒を見てもらわなくて、私一人でもなんとかなるはずだ。

「そんなに心配しなくてもいいのに」

独り言のように呟いたところ、「遙を心配しないなんて無理だから」と美玖さんに真顔で言われてしまった。

「家事が全くできない遙を一人にできなくて日本に残ったんでしょ？ 弟くん」

「うっ！」

私は動揺のあまり視線を泳がせる。

我が家の両親が、父親の仕事の都合で渡米することが決まったのは三年前。まだ高校生だった武は両親とともに渡米する予定だった。

だが、姉の生活力があまりにないことを心配して、日本にとどまると決めてしまったのだ。

あのときも「私は大丈夫だから」と説得したのだが、「姉さんに一人で生きていく素質はない」なんてヒドイことを言われた。

残念ながら武が言っていることに間違いはないので、反論できなかったのだ。痛いところを突かれて言葉に詰まる私に、美玖さんは最後のひと突きをした。

「そろそろ弟くんを解放してあげるときが来たんじゃない？ 彼、大学生でしょ。彼女と遊びに行きたいだろうし、もしかしたら家を出て彼女と同棲したいと思っているか

もね」

「それはダメです。相手の親御さんに挨拶に行つてからじゃなきゃ」
アワワワと慌てる私に、「今はそこ、問題じゃないからね」と美玖さんは冷たく言い放つ。

顔面蒼白そうはくでいると、美玖さんの鋭い眼光に射竦いすくめられた。

「とにかく。姉の心配ばかりしている弟くんを安心させてあげるのが先決だと思うな」
「それは、そうなんですけど。私、男性とお付き合いするつもりが全くないんですよ」
「そのつもりがなくても男を作りなさい。そして付き合いなさい。努力は必要よ。その姿勢が弟くんを安心させることに繋がると思うから」

強引な美玖さんに、私は「そ、そんなあ。むちゃくちゃです」と情けない声を上げた。
「もう、私に恋愛は無理です。貧乏クジを引くぐらいなら、しない方がマシじゃないですか。美玖さんだつてそう思うでしょ？ 合コンは結構です。会うだけ無駄ですよ」

こうなつたらこちらだつて引けない。

いつもは意見が分かれると美玖さんに負けてしまうが、この件に関してだけは譲ゆずることはできない。

頑がんとして考えを曲げない私を見て、美玖さんは思案顔をした。
何か企たくらんでいるのかもしれない……嫌な予感がプンプンとする。

眉間に皺しわを寄せていると、美玖さんはフッフと怪しげに笑った。

「合コンに行かないって言うのなら、この前のコンサートチケットは誰かに回すから」
彼女の言うコンサートとは、総勢五十組近くのアーティストが一堂に会する、テレビ局主催のコンサートのこと。美玖さんが応募したら見事当選したのだ。

「遙が好きなバンド出るから一緒に行く？」と、つい先日誘ってもらっていたのである。とても楽しみにしていたのに、今になってそれはない。

「私を連れて行ってくれるって言っていたじゃないですか！」
猛抗議する私を、美玖さんは冷たくあしらう。

「そんなこと言った覚えはないわ」

「美玖さん！ 話が違いますよ」

「コンサートに行きたいなら、合コンに付き合つて！」

「う……」

「私だつて出会いがほしいもの。考えてみてちょうだい、遙。年齢で言えば私の方が上よね。私だつて人生のパートナーを早く見つけなくちゃいけないの。遙より私の方が緊急度は高いわ」

「は、はあ」

確かにその通りかもしれない。しかし、さっきまで私の恋の話をしていただけなのに、いき

なり論点が変わった気が……。美玖さんの言わんとしていることが見えず、訝しく思いつつも頷く。

そんな私に、彼女はニツと口角を上げた。

なんだか意味深な笑いである。

戦々恐々としている私を諭すように、美玖さんは語りかけてきた。

「いつもお世話になってる私を諭すように、美玖さんが出会いがほしい、合コンがしたいと言っているのよ。それなら合コンするしかないでしょう？ やるべきでしょう？」

「美玖さん、笑顔がめちゃくちゃ怖いです」

半べそ状態の私に、美玖さんは腕組みをして言い放つ。

「合コン、絶対に参加してもらおうから」

「美玖さん！」

「参加しなかったら、コンサート連れて行かないわよ！」

なかおと
半ば脅しである。

卑怯だ、横暴だと叫ぶ私に、美玖さんはニッコリとほほ笑んだ。

「何を言っているの、これは私からの愛よ！」

不敵な笑みを浮かべる寺島美玖に勝てる相手は、この世の中にいないと思う。

自分の負けを悟った私は、顔を引き攣らせたのだった。

2

美玖さんとの一方的なやりとりから一週間が経ち、今日は火曜日。昨日、今日と仕事がとても忙しく、週が始まったばかりだというのに、すでに疲労困憊だ。

帰宅した私は晩ご飯を食べ終えてお風呂に入りベッドでゴロゴロしていると、スマホからピロロンと音がした。どうやらメールが届いたようだ。

ベッドから手を伸ばし、カバンの中に入れてあるスマホを取り出してチェックしてみる。メールは美玖さんからのだった。

『明日の夜は暇？』とだけ書かれている。どういう意味だろう。

少し考えてから気付いた。この前、情報誌を見て「このパンケーキ食べに行きたいね」と話していたので、明日行こうというお誘いかもしれない。

俄然元気になった私は、『暇ですよ』と打ち、すぐに返信する。

すると、間髪容れずに新たなメールが届いた。私は、その件名を見て首を傾げる。

「どういうこと？」

件名には『明日の装いについて』と書かれている。メールを開いてすぐ、私は愕然

とした。

『明日の夜、この前約束した合コンを開催いたします。約束だからね、絶対に参加してもらわうよ。当日の格好だけど、去年のバーゲンで買ったと言っていたオフホワイトのダッフルコート着用。インナーはコートの丈に合う可愛らしいワンピースに、足元はブーツで。以上』

反論は受け付けないという強い意思を感じる内容だ。

「なんじゃ、そりゃあああ！」

枕に頭をボスンと沈ませた私は、美玖さんとのやりとりを思い出した。

そのときに「合コンをして、彼氏を作った方がいい」と言われたが、あれから何も言ひ出さないで、冗談だったのだらうと安心してたのに……

「冗談じゃなかったってこと!?!」

電話をしようかと思っただけで夜も遅い。それならメールで抗議を、と考えたものの、送ったところで美玖さんが聞く耳を持たないことはわかっている。

すでに合コンのセッティングをってしまった以上、参加しない訳にはいかないだろう。もし、私が参加しないと男女比が変わってしまう。そうしたら幹事である美玖さんに迷惑がかかるし、コンサートにも行けない。

私が絶対に不参加と言えないように、美玖さんは開催が決定したタイミングで合コン

のことを伝えてきたのだ。

「やられた……」

こうなったらふて寝するしかない。身体も頭も疲れた。もう寝る。寝てやる。

そのまま布団を被って眠った私は、次の日の朝、結局美玖さんの言いつけ通りのフアッションで出社した。

コンサートのチケットのこともあるし、彼女を怒らせるとあとが恐ろしいのだ。

更衣室に入ると、美玖さんがニコニコと笑いながら私を待っていた。

「さあ、今日は合コンよ。きちんと用意はしてきた？ 遙」

「……」

朝から異様にテンションの高い彼女を見て、頬が引き攣る。

私がだんまりを決め込んでいるのに、美玖さんはとても楽しそうだ。

「私が指定した服、ちゃんと着てきたわね？」

「着てきましたよ。だって着てこないと美玖さん、怒鳴り込んできそうな勢이었다から」

ふてくされつつ言ったところ「よくできました」と頭を撫でられたが、何とも言えない気持ちになる。

やっぱりもう一度抵抗しよう。唇を尖らせていた私は口を開く。

「美玖さん。どうしても、合コンに行かなきゃダメですか？ 男性とお付き合いですつもりなんてないのに合コンに行ったら失礼ですし、会うだけ無駄じゃないかと」

美玖さんは渋る私を見つめ、窘めるたじなみに答える。

「行かなきゃダメよ。だって遙が行かなかつたらメンツが減るでしょ？ 皆に迷惑がかかるじゃない」

「そりゃ、そうですね」

「ここは幹事である私の顔を立てると思って、ね？」

拝み倒されてもまだ渋る私に、美玖さんは顔を近づけてくる。それも真面目な表情なので怖い。

「今回の合コンは男女五人ずつなの。そして、男性の一人に知り合いの医者があるのよ」

「お医者様ですか」

「そう。仕事が忙しくてなかなか彼女を作れないらしく、家族にも心配されているのよね」

困った男だわ、と美玖さんは深々とため息をつく。

「彼のタイプは、元氣いっぱい自分で自分を持っていて、変に媚こびたりしない女の子なんだって。あんまり女の子の子しているタイプは苦手みたい」

「は、はあ……」

戸惑う私に、美玖さんは畳たたみかけるように言い募る。

「それで思い出したの。彼のタイプにどんぴしゃな女の子が私の知り合いにいるじゃないって」

「もしかして、それって」

嫌な予感を覚えて口ごもれば、美玖さんはフンと得意げに笑う。

「そう、遙のことよ。絶対に彼と相性がいいと思うんだよね」

「……」

自信満々に言われても、答えづらい。

「どうやら美玖さんは、その男性と私を引き合わせたくて合コン開催を決めたみたいだ。訝いぶかしげにしていると、彼女は笑みを浮かべた。

「遙の好きな男性のタイプは、一緒にいて穏やかな気持ちになれる優しい人がいいんでしょう？ 草食系っぽい感じの男性が好きなのよね？」

「はい。クールな人とはどう接したらいいのかわからないし、ガツガツしている人も苦手かも」

「あとは浮気性じゃなくて、金銭感覚がしっかりしている人がいいんだっけ」
「もちろん！」

過去の恋愛で痛い目に遭ったので、そこは押さえておきたいポイントである。ただけどやっぱり、恋愛すること自体に及び腰になってしまう。

洪っていると、美玖さんが苦笑した。

「とにかく彼はオススメ。合コンのときにチェックしてみなさいな」

「は、はあ」

私は曖昧に頷き、美玖さんを見上げる。

「会ってみてご縁がなければ、別にお付き合いとかはしなくてもいいんですよね？」

「もちろんよ。そこまでは押し売りできないしね」

その言葉に、「それなら」と頷いたのだった。

終業時刻になって帰り支度をしていたのだが、上司に書類作成を頼まれてしまった。

会社を出られるのは、順調に終わったとしても十九時過ぎだろう。

美玖さんに連絡をして先に合コン会場に行ってもらおうようにお願いしたあと、再びパソコンをつけて仕事に取りかかる。

頼まれた書類は、以前作ったことがある別の書類と似ていたので、思っていたよりもスムーズに終えられた。

けれど、やはり合コン開始時刻までに店に入ることにはできそうにもない。

それでもあまり待たせてはいけなそうと思ひ、身支度を調べて教えてもらっていたお店へ急ぐ。

「あ、ここだ」

店の前に立った私は看板を見て、美玖さんから聞いていた店名と同じことを確認したあとに扉を開き、店の中を見回した。

洋風居酒屋らしいが、内装は古民家風だ。黒光りする天井の梁や柱、大きな囲炉裏が見える。

私たちと同様に合コンをしているグループもいるのか、盛り上がっている声が聞こえた。

キョロキョロしていると店員が声をかけてきて、すぐに部屋に案内してくれた。だが、そこで違和感を覚える。

美玖さんが今朝言っていた話だと、今日の合コンは男性五人、女性五人のはずだ。

それなのに予約してある個室はなぜか小さい。こんなところに大人十名も座ることができるのだろうか。

個室の外にある靴箱を見ても、美玖さんのハイヒールが一足と男性物の革靴が一足あるのみ。

腕時計を確認したところ、ただいま十九時過ぎ。合コンの開始時刻はとうに過ぎて

いる。

仕事で遅れた私が最後だと思っていたのに、他の人たちも遅れているのだろうか。しかし、ほとんどの人が遅刻？ そんなことって絶対にないと思う。

私は一度その部屋から離れ、店の外へ出た。

カバンを探ってスマホを取り出し、美玖さんに電話をかける。

『遙。仕事は終わったの？』

電話越しに耳をすましても、彼女の周りはとても静かだ。当初予定していた人数はいない様子だ。

やっぱり私の予想は間違っただけでなかったということだろう。

私はスマホを持ち直しながら、美玖さんに話しかける。

「えっと、今、店の前にいるんですけど」

『それなら早く来なさいよ』

彼女はそう言って急かす。だが、予約していた個室に入る前に、色々と確認しておかなければならないことがありそうだ。

私は、懇願に近い形で電話口に叫んだ。

「とにかく、美玖さん。一度お店の外に出てきてください！」

それだけ言うと電話を切る。スマホをコートのポケットに突っ込んでウロウロと落ち

つきなく店の前を歩いていると、やっと美玖さんが出てきた。

手を振ってこちらに向かってきた彼女の腕を掴み、店から少し離れた場所に連れて

行く。

「一体、これはどういうことですか？」

「どういうこと、とは？」

しらばっくれる美玖さんに、私は眉を顰める。

「とほけても無駄ですよ。合コンなんて嘘でしょう？ さっき予約している個室の前に行ったら、美玖さんと男性一人以外は来ていなかったじゃないですか」

「あら、バレちゃったのね」

のんきに呟く美玖さんを見て、ガツクリと肩を落とした。

とにかく説明をしてください、と頼むと彼女はばつの悪そうな表情を浮かべる。

「今、店内にいるのは私の従兄。親戚一同が心配するほど女っ気がないの、全くといっていいほど」

「はあ……」

嫌な予感しかないが、私は恐る恐る相づちを打つ。

「で、従兄の両親に頼まれていたのよ。誰かいい人を紹介してくれって」

「そ、それで？」

ここまできたら大体の予想はつく。だが、先を促した。

「この前、遙が愚痴ってきたでしょう？ そのときに今回の企みを思いついた訳」「企みて！」

頭が痛くなってきた。壁に寄りかかる私を見て、美玖さんは屈託なく笑う。

「この際だから、恋に気後れしている面倒くさい人たちをまとめて片付けてしまおうと思っただよ」

「あのですね、美玖さん！」

改めて抗議したのだが、全然聞き入れてくれない。

「ここまで来たんだし、とにかく会ってみてよ」

そう言った美玖さんは私の腕を掴むと、強引に店の中へ連れて行く。

そして予約していた個室の襖を開け、中にいる従兄に声をかけた。

一方で私は、襖の陰に立って入ることを渋る。

この部屋に入ったが最後、何かとんでもないことになるような予感がするのだ。

美玖さんが、私を心配して設けてくれた席だということはわかっている。

だけど、今は恋愛をする気は毛頭ない。

万が一、美玖さんの従兄が私を気に入ったりしたらややこしいことになってしまう。なんととしても、今から会う男性に嫌われるようにしなくては。

私から断ったところで、美玖さんは再びこんな席を設けかねない。

それなら、今から会う美玖さんの従兄だという男性に断ってもらうのが一番いいはずだ。

なので、彼に嫌われる努力をしよう。

グッと拳を握って気合を入れてみると、美玖さんが声をかけてきた。

「ほら、遙。入っていらっしやいよ」

「はい……」

ここまで来て顔を出さないのは、相手に失礼だろう。

そう考えて、渋々と男性が待つ個室へ足を踏み入れた。

すると、私たちを待っていた男性と目が合う。スクエア型の眼鏡をかけた男性は、おしほりを手にして私をジッと見つめている。

彼は小首を傾げたあと、何か考えこみ始めてしまった。

だが、すぐに眉間に皺を寄せ、明らかに不機嫌そうに私から視線を逸らす。

柔らかそうな髪、整った顔、引き締まった身体。

パッと見ただけでもステキな男性だ。そんな彼の姿に、私は既視感を覚えた。

（あれ……？ この人って……あつ！）

ビククリして叫びそうになったのをグッと堪える。それと同時に胸の鼓動がうるさく

なった。

前に座る男性は、先日、忘年会で課長を助けてくれたお医者様だったからだ。
(まさか、美玖さんの従兄だったなんて)

世間は広いようで狭いものだ。改めてそれを実感する。

しかし、今の彼は課長を助けてくれた日の彼とは少し様子が違う。

以前の彼はもっと柔らかい雰囲気で、笑顔もとても優しげだった。人懐っこくてほんわかしていたから小児科の先生かなあと思ったほどだ。

しかし、今の彼にその優しげな雰囲気はなく、どこか不機嫌そうに見える。

「こんばんは」

挨拶をしないのも大人としてどうかと思い、頭を下げる。

だが、彼はそっぽを向いて「どうも」と言うだけ。冷たい態度にちよつと幻滅してしまふ。

とはいえ、これは私にとつては好都合だ。

目の前の男性がどれほどステキな人だとしても、私はお付き合いする気は毛頭ない。

それも私にとつての鬼門、眼鏡男子ときたもんだ。これはもう問答無用で恋愛対象外である。

私は、とにかく彼に嫌われない一心でこの場にやってきた。

そして彼も、どうやらこの場所にいたくないらしく機嫌がとても悪い。

この調子なら、あちらから断ってくれそうだ。

だけど、念には念を。彼に嫌われる努力をしておかなければ。

美玖さん曰く、『彼のタイプは、元氣いっぱい自分で自分を持っていて、変に媚びたりしない女の子』だとか。さらに、あんまり女の子の子の子していない方がいいらしい。

それなら、その真逆を演じてしまえばいい。

優柔不断でなよなよしていて、媚びを売りまくりの女を前面に出したキヤラになれば、彼は私と付き合いたいなどと血迷つても言い出さないだろう。

(よし、この戦法に決めた！)

演技力など皆無の私がどこまでできるかわからないが、やるしかない。

「遅くなってごめんなさい。お待ちせしちやいましたよね？」

媚びるように甘えた声で謝ると、彼は私をちらりと見てすぐに視線を逸らした。

「かなり待った。さつさとメシ食って帰りたい」

美玖さんの従兄である彼はそっぽを向いたまま、ぼそりと呟く。

よしよし、なかなかいい調子だ。

不穏な空気が漂う中、私は内心ほくそ笑む。

店員を呼び、私は美玖さんとお医者様の彼にメニューを見せながら甘ったるい声を

出す。

「何にしようかなあ。酎ハイだけでも、こんなに種類があるんですよお。迷っちゃいますう」

美玖さんは一瞬ぎよつとしたけれど、すぐに私の意図に気付いたらしく、呆れ顔だ。

二人は頼むものを決めたのに、私はまだ決めかねているというポーズをとった。

美玖さんたちと同じものにしようと決めているけど、敢えてそこは優柔不断な女を演じる。

「えーつと、オレンジとグレープフルーツ。どちらがいいと思います？ 私、決められない」

わざと彼に聞いてみたが、「別にどっちでもいいんじゃない？」と投げやりだ。

私はそれでも懲りずに、科を作る。

「でもお、お二人がビールなら私も同じものにしちゃおうつと」

私は舌つ足らずの口調で瓶ビールを注文する。

少々お待ちください、という店員の声を聞き、こっそりとほほ笑む。

よしよし、作戦成功だ。この調子で徹底的に嫌われようじゃないか。

もつと優柔不断で、一人じゃ何もできない女子を演じて、ついでに媚びを売りまくる女になってやろう。

だけど、意外に疲れることに気付いた私が内心冷や汗をかきまくっていると、店員はすぐさま注文の品を運んできた。

ありがとおうございまっすう、と笑顔で言ったが、明らかにイントネーションが怪しくなったし、舌を嚙んでしまった。

これは思ったより大変なことになりそうだ。背中に冷や汗がツーツと流れたのがわかる。

それでも気持ち切り替え、グラスを二人の前に配ろうと手を伸ばす。

だが、私より先に美玖さんの従兄である彼がグラスを手にし、こちらに差し出した。きた。

彼はなぜか、あの日と同じ爽やかな笑みを浮かべている。

そんな彼に、私は「あれ？」と不思議に思っ目目を丸くした。

ギスギスした雰囲気だったのに、いつの間にか友好的な視線を向けられている。

先ほどまでの不機嫌さはどこに行ってしまったのか。

戸惑う私に、彼はにこやかにほほ笑む。

「どうぞ」

「あ、ありがとうございますう」

一体どうということだろうか。

差し出されたグラスを受け取った私は、そこにビールを注ぐ彼を注意深く見つめる。すると、彼はハッと目を見開いた。そして「別に……」と慌てた様子で横柄な態度に変わったのだ。その、あまりのギャップに目を見張ってしまふ。私の探るような視線に気が付いているのだろう。彼は、ごまかすみたいにビールを飲んでる。

私が見つめ続けていると、焦りを感じているのか。彼は、挙動不審になってきた。空になったグラスをテーブルに置こうとしたのだが、転がしてしまい焦りだす。そうかと思えば、何度も眼鏡に触れてクイツと押し上げるなどして、とにかく落ち着きがない。見ていて滑稽なほどだ。

私が見守る中、明らかに目が泳いでいる彼は、二杯目のビールを飲み干した。

「早く帰りたいんだけど」

グラスを置きながらそう冷たく言い放ったくせに、ジャケットを脱いで寛いでみせたあと、慌てて着直す。

(もしかして、彼も自分を偽っている……?)

突如として態度が変わったのを見て、確信に近いものを感じた。

年末の姿が本当の彼で、今の彼はわざと横柄に振る舞っているのかもしれない。理由はきっと私と同じ。彼も誰かと付き合いたいとは思っていないのだろう。

チラリと美玖さんを見ると、呆れ顔でビールを飲んでる。やっぱり気が付いているらしい。

美玖さんに咎められないよう、サツと視線を逸らす。

二人して偽りの姿でやりとりをしていれば、素の姿を知っている彼女が違和感を覚えるのは当然のことだ。

やがて、美玖さんはグラスをテーブルに置き、口を開く。

「ちょっと二人とも。いいかげんにしなさいよ!」

美玖さんがついにキレた。

怒りつつも半ば諦めた様子の彼女は、大きなため息を零したあとで改めて彼を紹介しだす。

「遙。こちら私の従兄の黒瀬新くん、三十五歳。遙より八つ年上よ。ほら、春ヶ山駅の近くに黒瀬医院ってあるでしょ? 昨年祖父が引退したから新くんが院長をしているの。で、仕事にかまけすぎて未だ独身。そして何年も彼女なし」

美玖さんが彼——黒瀬先生の紹介をしている間、彼は黙ってビールを飲み続けている。それを歯がゆく思っているのか、美玖さんの眉間に深い皺が刻まれた。

「で、あまりに女性に興味がなさすぎて将来が心配だと親戚たちが言い出してね。私に誰かいい人を紹介できないか打診が来たという訳よ」

今まで静かにビールを飲んでいた先生だったが、グラスをテーブルに置くと美玖さんを睨みつけた。

「美玖。僕のことには心配無用だ。親戚一同にそう言うっておいてくれ」

「私じゃなくて、新しくが親戚一同に言えばいいでしょ？」

美玖さんがビシヤリと言いのけると、先生は黙り込み、再びビールを口に始めた。

そんな様子の彼を見て美玖さんはあからさまにため息をつき、私に向き直る。

「で、こちらは私と同じ会社で働いている渋谷遙、二十七歳」

「渋谷……遙？」

先ほどまで私には無関心で目も合わさなかった先生だったが、美玖さんが私の名前を言った途端、驚いたように目を見開き、私をジッと見つめてくる。そして、どこか探るみたいに問いかけてきた。

「失礼、渋谷さん。君は滝本キヌさんというおばあちゃんを知っていますか？」

「え……は、はい。スポーツジムが一緒なもので。でも、どうして滝本さんのことを？」

滝本さんというのは、私に通っているジムで知り合った人だ。

御年七十五の元気なおばあちゃん、一緒にプールで泳いでいる。

滝本さんと私は、サスペンスドラマが好きなこと、意気投合した。ジムで会ったときに、その週に放映されたサスペンスドラマの批評をするのを密かな楽しみにしている。

それにしても、どうして先生は滝本さんのことを知っているのだろう。また、なぜ滝本さんを知っているのかと私に問いかけてきたのか。

意味がわからず首を傾げるものの、彼は答えてくれない。だが、その時を境に態度をガラリと変えてきた。

先ほどまで私のことは無視に近かったし、明らかに付き合いたくないというオーラを放っていた。

しかし、今はどうだろう。

私の顔に何かついていますか？ と聞きたくなるほど私を見つめている。しかも、どこなくキラキラした目で。

その視線の熱さに、戸惑ってしまう。

私が困惑していると、美玖さんはニヤニヤと意味深に笑う。

「それじゃあ遙のプロフィールは本人に聞いてくれるかな、新しくん」

そう言うと、美玖さんが突然立ち上がった。

私はそのことにビックリして声を上げる。

「美玖さん！ どこ行くの？」

「あとは二人でどうぞ」

「二人でどうぞって！ 美玖さん！」

美玖さんはさっさとハイヒールを履いて、手を振りながら個室を出て行ってしまった。残された私は、気まずいなんてものじゃない。美玖さんのバカ。どうして初対面の二人を置いて帰ってしまうのか。明日、会社で絶対に抗議してやると心に誓いながらも、まずはこの局面を乗り切ることを考えなくてはならない。

とにかく最後の最後まで気を抜かず、自分を偽るべきだ。元氣すぎるいつもの私じゃなく、優柔不断で媚びを売る女を演じて、少しでも早く席を立つ。それしかない。

心の中で改めて決意をし、目の前に座っている先生をチラリと見る。すると、彼が未だに私を見つめ続けていたため視線が合いそうになり、焦って逸らした。

彼の視線を身体中に感じ、居心地が悪いなんてものじゃない。

さて、どんな理由をつけて席を立とうか。

そんなことを頭で考えながら、先生の様子をもう一度チラリと窺う。私と視線が合うと、先生はニツコリとほほ笑んだ。

その瞬間、ドキッと胸が高鳴って慌てて俯く。

(本当に、さっきまでの不機嫌はどこにいったの!?)

あまりのギャップに驚いたものの、落ち着いてくるに従い、どんどん可笑しくなってくる。

最初は肩を震わせるだけにとどめておいたのだ。だけど……

「プツ……あはは」

とうとう声を出して笑ってしまった。クスクス笑い続ける私に、先生は驚いたように目を見開いている。

驚いたのはこちらですよ、と心の中で呟きながら、私は先生に言う。

「黒瀬先生はあ、早く帰りたいんですよねえ？ 先ほどご自分でおっしゃっていましたか？」

「っ」

ぶりっこキャラを意識しつつ伝えると、先生は言葉に詰まったみたいだ。

「私と付き合いたくないっていうのがあ、丸わかりでしたよお」

「渋谷さん」

困ったようにほほ笑む先生は、とても可愛らしかった。

私より年上の男性に可愛らしいなんて言ったら、怒られるだろうか。だけど、そう思ってしまったのだから仕方がないだろう。

私はフツツと笑いつつ、先生にネタばらしをすることにした。

「実は私、先生の本当の姿を知っているんです。なので、キャラクターを偽っても無駄ですよお」

「え？」

再び目をまん丸くする先生が可笑しくて、また声を出して笑う。

「年末、居酒屋で一人の男性を助けられたこと。覚えていますか？」

「年末？ ……ああ!!」

課長が倒れてしまったときのことを思い出してくれたみたいだ。

先生は再び私の顔をジッと見たあと、ばつが悪そうな表情をする。そして困ったように眉を下げて、髪をかき上げた。先生の柔らかそうな髪が、サラサラと揺れる。

「渋谷さんはその場にいたということですよ？ スミマセン、覚えていなくて」

しかも、貴方あなたに腕を掴まれました。そう話したら先生はもっと驚くだろう。けれど、それは口にせずに首を横に振った。

「仕方がないことだと思えますよお。あんな状況でたまたま居合わせた人間の顔を覚えていっているなんて無理ですよ」

何しろ緊急事態だったのだ。あの状態で私の顔を覚えていたなんて言われたら、どれだけ物覚えがいいのかと驚いてしまう。

恐縮し続ける先生に、私はほほ笑みかけた。

立ち読みサンプル はここまで

「ここで先生を見て、すぐにあのときのお医者様だってわかったんです。だからあ、一生懸命にキヤラを作っている先生が可笑しくて噴き出しちゃったんですよ」

「そうだったんですか」

そうなんですすよ、と甘えたように返したが、私の方は自分の素を隠しきれただろうか。

ドキドキする胸の辺りをギュッと握りしめる。

チラリと先生の顔色を窺うかがったが、特に変化はない。私にこれといって違和感を覚えていない様子だ。

ホッと胸を撫なで下ろしつつも、自分の性格を偽ることがこんなにも難しいのだと今さらながらに実感する。

私が必死に動揺を隠そうとしていると、先生は自嘲じちようめいた笑みを浮かべた。

「僕が性格を偽っていたこと、渋谷さんには初めからバレてしまっていたのですね」

「ええ、バレバレでしたよお。無理しているのがヒシヒシと伝わってきましたもの」

優しい性格は隠しきれれるものじゃないようだ。

人のことをああだこうだと言える立場じゃないけど、わかりやすかったですよ、黒瀬先生。

相変わらず恥ずかしがっている先生が可愛くて、思わず頬ほを緩ゆるめてしまっそうになっ